現況分析における顕著な変化についての説明書

教　育

平成２２年６月

富山大学

目　　次

２．人文科学研究科　１
７．生命融合科学教育部　２

整理番号	39-2-1

現況分析における顕著な変化についての説明書（教育／研究）

法人名　富山大学　　学部・研究科等名　人文科学研究科

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目：教育の実施体制

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

〇顕著な変化のあった観点名：基本的組織の編成

「研究分野配置教員数と研究分野所属学生との不均衡状態が持続している」ことの主たる要因は、分野数（26）・教員数（66 名）と学生数の不均衡である。入学定員が現状で 10 人と少ないため、不均衡是正の要点は、全教員が必ず院生を抱えるべきとすることではなく、①研究分野の統廃合、②研究指導しうる教員が有効に連携・協力できる体制の構築、の２点である。

以上の認識に基づき、新しい研究科組織を検討する中で不均衡を是正するための方策を検討しており、平成 23 年度設置を目指した設置計画（事前伺い）では、２専攻を１専攻とし、①については、15 分野に統合した。また②については、現状の正副２名の教員による研究指導体制をさらに活性化するために、親和性の高い研究分野を、思想・歴史文化、行動・社会文化、言語文化の３領域にくくり、正指導教員と、原則として領域内から選ばれる副指導教員１名を含む計２～３名の教員による共同指導体制をとることで、全教員が多角的に研究指導に関与する体制を構築する。

「環日本海地域との交流に資する人材の育成という目的に相応して、留学生の受入れや研究分野の履修生の育成が果たされているか」を検証するために、平成 16～21 年度の６年間の修士論文全 80 編の主題を精査し、以下の結果を得た。

- 環日本海地域との交流に資するテーマが 59 編（約 74%）を占める。
- 留学生は全部で 16 名（20%）。うち中国：12 名（言語学８、国際文化論１、社会学２、心理学１）、ロシア：２名（人間学１、言語学１）、モンゴル及びトルコ：各１名（言語学２）。全員の修士論文のテーマが環日本海地域に関係していることを確認した。
- 研究生は、中国６名（中国文学１、国際文化論１、日本文学１、社会学１、言語学２）、ロシア４名（人間学１、言語学１、国際文化論２）の計 10 名が在籍した。

以上から、環日本海地域との交流に資する人材の育成という点で多大な成果を上げたばかりか、留学生の受入れについても相応の成果を上げたと判断できる。

「ロシア語、朝鮮語、中国語を学ぶ専攻生が少なく、朝鮮、中国、ロシア関係の研究分野に所属する大学院生が所属していない」という平成 16～19 年度の評価における指摘を念頭に、平成 16～21 年度の修士論文全 80 編の主題を精査し、以下の結果を得た。

- ロシアを研究対象とした学生：３名（言語学１、ロシア言語文化２）。
- 中国を研究対象とした学生：７名（人間学１、国際文化論２、言語学４）。
- 朝鮮を研究対象とした学生：３名（国際文化論１、社会学１、言語学１）。
- モンゴル語を研究対象とした学生：２名（言語学２）。

また、平成 20 年度にはロシアから１名、平成 21 年度には中国から３名の留学生が入学している。

このように、環日本海地域を研究分野とする学生は、ロシア言語文化分野の他、言語学、人間学、国際文化論などにも所属しており、ロシア、中国、朝鮮、モンゴルを研究対象とする学生の割合は約 19%に上ることが検証された。また、この事実は、相当数の学生が、当該地域の言語を学んだことを裏付ける。

整理番号	39-7-2

現況分析における顕著な変化についての説明書（教育／研究）

法人名　富山大学　　学部・研究科等名　生命融合科学教育部

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

質の向上度：事例1「平成 20 年度概算要求事項選択」（分析項目Ⅰ）

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

平成20年度概算要求事項において特別教育研究経費〔教育改革〕:「障害者が主体的に参加する最先端生命融合科学教育事業」が採択された。この教育改革を実施するために平成20年度にソフト及びハード面から準備を開始した。平成20年度に障害学生特別入試の事業がスタートし、平成21年度には、博士課程障害者特別入試を実施し、全盲の障害学生１名、更に平成22年度には発達障害の学生１人が入学した。博士課程における身体障害者特別入試による学生の受入れは全国で初めてである。障害者が主体的に研究に参画できるように、医学薬学系、及び理工学系にそれぞれ障害学生用の室を準備し、工学部には点字ブロックを設置し、工学部構内の一部をバリヤフリー化するなどの整備を行った。また、障害学生を支援するための組織「富山大学大学院生命融合科学教育部障害学生支援タスクチーム要項」を整備し、研究・生活等の相談を受ける教員を配置するなど、ソフト及びハードの両面から障害学生を支援している。更に、障害学生の教育・研究の一環として公開研究会を実施したほか、障害学生の教育・研究のみならず種々のシンポジウムを開催し、学生の専門性と学際性の発展を促すとともに地域関係者と学生の交流を深めた。（資料１、２）上記の如く平成20年度以降、これら事業が具体化され、本教育部の障害者及び健常者の学生に対する教育環境が着実に改善されていることを示している。

資料１：シンポジウム・公開研究会開催状況

開催日	区分	題　　名	参加人数		
			学外	学内	合計
H20.3.10	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	心のセンシング	12	82	94
H20.7.18	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	ケミカルバイオロジー・現状と今後の展開	7	48	55
H21.2.28	公開研究会	理系の大学院の障害学生支援を、今、変える	59	16	75
H21.3. 6	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	脳はどこまでわかったか?	6	74	80
H22.2.20	公開研究会	誰でもわかる視覚障害者の能力	67	22	89
H22.3. 8	ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	富山発医療・創薬イノベーションに向けて	15	68	83

資料２：公開研究会「誰でもわかる視覚障害者の能力」開催要項（抜粋）

富山大学大学院生命融合科学教育部公開研究会：誰でもわかる視覚障害者の能力
期日:平成 22 年 2 月 20 日(土)　　会場:名鉄トヤマホテル 3 階 清風
総合司会：伊藤聡知（富山大学生命融合科学教育部）

9:30～ 9:40	開会挨拶　西頭徳三（富山大学長）
9:40～ 9:45	開催趣旨説明　津田正明（富山大学生命融合科学副教育部長（本会世話人））
9:50～10:35	「福祉工学の視点から視覚障害者の能力を科学する」 伊福部達（東京大学先端科学技術研究センター）
	【６名の各分野で活躍している視覚障害者による発表】
10:55～11:20	数学分野の能力　守井清吾(富山大学大学院教育学研究科)
11:30～11:55	音響分野の能力　鈴木淳也(富山大学大学院生命融合科学教育部)
13:00～13:25	医学分野の能力　大里晃弘（大原神経科病院医師）
13:35～14:20	音楽分野の能力　YOUTA（演奏家） ピアノ生演奏（曲目：名曲メドレー/即興、英雄ポロネーズ/ショパン　など）
14:30～14:55	語学分野の能力　王　崢（著述業）
15:15～15:40	コンピューター分野の能力　九曜弘次郎
15:50～16:30	総括　鳥山由子（筑波大学障害学生支援室シニアアドバイザー）
16:30～16:40	閉会挨拶　黒田重靖（富山大学生命融合科学教育部長）